



あなたの身近に 中国文学



★皆様、正直「中国文学の研究ってどこかで活かされているの…？」と思っている人は多いのではないのでしょうか？確かに文系の研究は理系に比べると地味な印象ですし、これといった技術的進歩ももたらしません。ですが、その成果は地味ながらも文化の中に反映されているのです。その一例を、今回は「三国志」を題材にしたマンガから紹介してみようと思います。

★紹介するのは、「三国志」で有名な魏の曹操の一生を、独自の解釈で描いたマンガ『蒼天航路』。武将としてはもちろん、政治家・詩人としても名の知られた曹操ですが、ここで取り上げるのは彼ではなく、その息子の一人曹植です。彼は曹操の第三子として生まれ、抜群の詩文の才によって愛されましたが、後に兄である曹丕^{※1}との跡目争いに巻き込まれ、争いに敗れた後は、不遇な生涯を送ったといわれます。

そんな曹植ですが、日本での知名度はともかく、中国でその名を知らないものはいません。というのは、彼が「国破れて山河有り…」の「春望」で有名な「詩聖」杜甫と並び立つほどの詩の神であるからなのです。紹介する場面では、その詩の神たるさまが描かれます。

脚色が多いマンガなので史実だけ述べると、場面は建安23年(218)のことです。この前年に、曹操らに続いて文学界をリードしていた「建安七子^{※2}」のうち生き残っていた五人全員が疫病により亡くなりました。曹植は、曹操の忠実な配下であり、自分のよき友人でもあった彼らを失った悲しみを、壁に叩きつけるかのように詩にしていきます。

当時の文学一年号から「建安文学」と呼びます—は後漢末期の混乱する世の中を嘆き、憤りつつも、それらを激しい創作のエネルギーへと変換した気骨ある文が特徴とされました。この場面に「建安文学」の有り様が凝縮されているといってもいいでしょう。

★さて本題に戻ります。この場面には、曹植が実際に作った作品やその日本語訳、また曹植の生き様が十分に描かれています。これだけのものを描くためには、曹植の人物像とその作品を理解することが欠かせません。しかし、それを自分だけの力で調べ上げるには膨大な時間と労力を費やしてしまいます。今はネットで調べるという手段もあるのですが、やはりほしいのは確かなデータです。そこで中国文学研究の出番です。曹植の詩文に日本語の訳注をつけた数少ない本として『曹植(中国詩人選集3)』（伊藤正文注、岩波書店、1958年）があります。この中に収められる詩はもちろんのこと、冒頭の解説文や、編集を担当者の後書きも大きな要素となっていると考えられます。一部抜き出してみましたので裏面のマンガの文と見比べてみて下さい。

- ・私には、人間のもつ限りない悪意が、狂ったように中国全土を駆けめぐったのが、この時代であると思われる。
- ・そこには、ギリギリの生活に抵抗する文学者たちの凄まじいエネルギーの噴出があったし、文学者なるが故にひとり醒めたまま、狂気につかれた人間のあがきを凝視しなければならぬ苦しい思いがあった。しかもこの凝視は次には彼自身に向けられる。（伊藤正文 解説）
- ・彼は、ある時期にわたって、中国の詩の神であった。八世紀の中ごろ、万能の詩人である唐の杜甫が出てから、詩の神の座は、杜甫へとうつったけれども、それまでの数百年間、六朝から唐の初期へかけ、その時代の詩の神は、曹植であった。（吉川幸次郎 跋）

いかがでしょうか。この文章を書いた二人はいずれも中国文学研究で名のある学者で、曹植という詩人の理解に努めてきたわけですが、これが『蒼天航路』での曹植のキャラクター作りに影響していることがおわかりいただけるのではないのでしょうか。これは何も曹植一人に限った事ではありません。大袈裟に言うと、『蒼天航路』やその他三国志を題材にしたマンガやゲームを作ることができるのも、その裏に膨大な人物のデータを調べ上げてくれた学者たちの成果があるからなのです。

中国文学の研究が身近に活かされていること、皆さんに少しでも気づいていただければ幸いです。ここまで読んで下さりありがとうございました。

※1：曹操の第二子で、魏の初代皇帝（文帝）。彼も詩人として有名であり、曹操・曹植と合わせて「三曹」と呼ばれる。
※2：三曹に並んで、当時の文学界をリードしていた七人、孔融・王粲・陳琳・徐幹・劉楨・阮瑀・應瑒のこと。このうち孔融と阮瑀はすでに亡くなっている。



李学仁原作（原案）、王欣太画
『極厚版 蒼天航路』第11巻より
その三百五十六「激情の後継者」
（講談社、2009年）

